

現地に学び現地とともに

小泉 浩郎

安倍ノミクス=展望を欠く諸改革

山崎農業研究所は、本年で40周年を迎えた。奇しくも減反政策(生産調整)が導入され農政が大きく変換した時代(1970年代)に活動を開始し、40年を過ぎた今(2014)は、この減反政策(生産調整)が農業構造改革の足枷とされ競争こそ成長だとする農政へと大変革の時期にある。

この40年は、現場の農業・農村は、米政策を中心に、いわゆる「猫の目農政」に翻弄され耐え忍んだ40年であった。だが、農業・農村の現場には、毎日の暮らしがある。上からの農政を看過し盲従してきたわけではない。それぞれの現場の中で知恵を絞り汗を流し、風土を活かした多様な営農と暮らし方を工夫してきた。

たとえば、ごり押しともいえる減反(生産調整)は、現場の知恵と工夫で、不公平感排除に「共補償」、転作分散(バラ転)に「集団転作」、連作防止に「ブロックローテーション」、水田の総合的な利用に「水田輪作」「集落営農」といづれも現場の実践から発想し普及した。そのほとんどが国の施策へとつながり、水田農業の新たな展望を開きつつあった。

だが、戦後レジームからの脱却と呪縛からの解放を旗印とする諸改革は、唐突、急進であり、この現場の状況を十分検証せず、減反を悪政と決め込み、全く将来展望を欠く選択となっている。

「3.11」。世界史に刻印された大震災と原発事故によって日本、いや世界中の人々も含

めて悲しみを共有し、これまで選択してきた文明に警鐘が鳴らされ、新たな復興を決意した。あれから3年以上が過ぎたが、まだ多くの被災者が苦渋の生活にあるなかで再び同じ道に戻り、歩みを速めているように見える。

国外での武器使用の道を開いた集団的自衛権行使への憲法解釈の変更、主権が失いかねないTPPへの加入、市場競争こそ成長だとするアベノミクス、夢のエネルギーと喧伝された原子力発電所の事故、論文至上主義のSTAP細胞不祥事件など、政治・経済、科学、技術のあり方が、これほど問われている時代はない。

その渦中にある農政改革、TPP、農政改革、大規模効率化、輸出産業化、農協再編、農業委員会廃止など農業・農村の現場を無視した市場至上主義のドリルの刃がいくつも用意され具体的に動き出している。

山崎農業研究所は、科学は国民のためであり、農業研究者・技術者は生活者と農業者のためにあるとし、「現場に学び現場と共に歩む」ことを理念として活動をしてきた。「現場に学び現場と共に歩む」ことの重要性が、今こそ強調されてよい時期である。ここでいう「現場」とは、単なる現場ではない。地域ではぐくんできた歴史や文化、風土を活かした農の営み、さらに日常の暮らしや人々の持つ「力」や「生き方」まで含めた「現場」である。

山崎農研——基本路線を歩む

「現場に学び現場と共に」を理念とした山崎農業研究所は、何をしてきたか。

この40年間には、その存続を問うほどの厳しい状況が何度も起こった。代表の交代(代表のリーダーシップとカリスマ性の継承)、体制・財政基盤の強化(株式会社化とシンクタンク機能の強化)、体制・運営の簡素化(合理化と任意団体への改組)など、その都度、話し合いを重ねてきた。研究・普及・農政が農業農村の現場から離れ、私たちのような民間団体の多くが後退している時、小さくとも、弱くとも「継続は力」と会員に支えられ基本路線を歩んできた。

(1)研究所報「耕」の定期発行(季刊):調査・研究活動成果、投稿論文、農村定点観測など(各号50頁程度)の発行、会員および国会図書館等関係機関に配布。

(2)会員総会:一年間の活動内容、次年度活動計画の報告・審議、総会記念講演、シンポジウムの開催。

(3)山崎記念農業賞の表彰:会員の基金と推薦による表彰事業。

(4)定例研究会:研究者、専門家、農業者等を講師に定例(含む現地)研究会の年5回程度開催。

(5)緊急提案:TPPへの提案(定例研究会、「耕」、HPでの特集)、原発事故産地再興・現地シンポジウム(福島市)。

(6)図書出版:近著、『食料主権』(山崎農研編)、『21世紀水危機=農からの発想』(山崎農研編)、『自給再考』(山崎農研編、韓国での再版)。

(7)受託研究:官公庁、自治体、民間等からの委託。

(8)会員との交流:メールマガジン『電子耕』(隔週)、「はがき通信」(随時)。

(9)会員:年会費5,000円(学生会員:3,000円、賛助会員:1口30,000円)。

別表:これまでの表彰(第1回~第18回)

回数	受賞者	受賞理由
第1回(1975)	菱沼達也氏	『私の農学概論』の著作、農民不在の農学研究を批判、農民に学び農業に尽くそうと主張。
第2回(1976)	渡辺高俊氏	独学の獣医師、酪農・乳牛の観察結果から体型と泌乳能力の関係を実証、また安房酪農諸般への貢献。
第3回(1977)	佐藤初江氏	もっと豊かで情緒ある暮らしをと生産・生活についての研究と改善及び農村の民主化・婦人の地位向上のための諸活動。
第4回(1978)	加藤政信氏	地域に密着した創造的な農業改良普及活動、特に自作漫画による解説、広報がユニーク。
第5回(1979)	丸藤政吉氏	イネの安定多収を課題に、30年にわたり月刊「農村通信」を発行。2014.7.1現在800号。
第6回(1980)	貝川正也氏	農業教育研究会を組織し、農業教育の改革をめざした諸活動。
第7回(1981)	石原八重子氏	農村現場に密着した長期にわたる生活改良普及活動。
第8回(1982)	小林芳正氏	主婦中心の稲作技術の普及、独自のふるさと運動の展開など、山間地の農協営農指導活動。
第9回(1983)	大八州開拓農業協同組合	満州より無一物で引き揚げ、遊水地に入植以来30年の独自の営農と生活を築き上げた諸活動。

●表彰の理念

農業関係の表彰事業は、天皇杯を筆頭に功成り名遂げた人の「功績賞」、現政策の効率的展開のための「奨励賞」、高い学問的評価の「学術賞」などがある。なぜ、表彰事業か。他とどう違うか。「立派でした」「ご苦労様でした」ではなく、「頑張りましょう」と将来を展望する活動を対象とした。したがってその目的は、日本農業の自主的発展のための原石を探し出すことであった。

山崎農業賞(先生没後山崎記念農業賞と改名)創設に当たって、山崎先生は、「農業・農村の現場には、従来の表彰の対象とならない貴重な工夫や実績がある。また、また研究や普及活動のなかには、普通の学会賞になじまないが、人々を啓発し、勇気づける貴重な論

文や著作もある。それらを見つけ出し表彰することは、関係者を勇気づけ、日本農業の自主的発展に寄与できる」とした。

また、推薦・選考は、「学問的な価値よりもむしろ日本の農業・農民に役立つか、日本の農業・農民を大事にする気持ちを根底にした業績であるか」を評価の重要なポイントとした。さらに、「人間のためになる仕事をしたことに感謝し、更に将来に向けて激励すること」を基底においたのである。

したがって、そこでは、表彰対象の活動に何を学び、将来に何を期待するか、表彰する側の山崎農業研究所のものの考え方が問われる。その選考は常に緊張感のなかで進めきた。

運営は、会員の浄財による「表彰基金」である。何の副賞もない。活動の評価と将来への期待を短い表彰文に織り込んだ表彰額だ

回数	受賞者	受賞理由
第10回(1984)	岩手ぶどう座	山村での33年間にわたる演劇活動と地域文化への貢献。
第11回(1985)	宇根 豊 氏	百姓の体験を如何に理論化するか。虫見板での減農薬稲作理論と実践。
第12回(1986)	山田桂子 氏	農家の聞き書きと『『待ち』の子育て』の執筆および「たけのこ保育園」での実践。
第13回(1987)	神奈川および船橋農産物供給センターの両団体	生産者と消費者が一体となって地場生産・地場消費の運動。全国産直運動の代表。
第14回(1988)	野本七郎・くに 御夫妻	掘り取りの苦勞から編み出した野本式長芋堀取機の発明と製作、千曲川沿い農家300余戸に普及。
第15回(1989)	仲山尚江 氏	10年以上の観察と記録にもとづく田んぼの「地能指数」「田面」を読む稲作作法と詩作。
第16回(1990)	安間節子 氏	腰痛解消を栽培法、働き方に求め、農作業事故の原因究明とその対策に農家の主婦と共に取り組む。
第17回(1991)	酒井信一 氏	資源のリサイクルとエネルギー資源の有効利用について提案と実践そして普及。
第18回(1992)	岸本定吉 氏	炭やきを通して、森林資源の有効利用と地域農業の活性化に寄与。

けである。この表彰は、会員全員の心からなる贈り物である。

●受賞者の横顔

これまで、28個人、9団体を表彰してきた。個人のなかには、3夫婦、1家族が含まれ、また5人の女性と1つの女性団体も選ばれている(別表参照)。

活動されている領域は、多岐にわたる。大きく分けて、①著作・論考(3)、②文化代活動(2)、③技術・農法の創出(16)、④教育・普及(7)、⑤地域づくり(9)である。

①は、山崎先生とともに山崎農研の思想的基盤を作った菱沼達也氏の『農学概論』で、農民不在の農学に警鐘を鳴らした。②の丸藤政吉氏(第5回)が創刊した「農村通信」は今年800号を更新している。演劇活動の「岩手ぶどう座」は、60年の歴史を重ねている。③岸本定吉氏の「炭焼き」、野口種

苗研究所の「種子を農民と地方へ」、古野隆雄・久美子ご夫妻の「合鴨+水稲同時作」、鋸谷茂氏の「生態保全育林法」、宇根豊氏の「虫見版」など、いずれも野の発想である。

④では佐藤初江さん、石原八重子さん、安間節子さんらが生活改善運動で「草の根・カイゼン手法」に成功した。宮古農林高校環境班の皆さんの「土づくりから地下水保全」は、世界水大賞の受賞へと展開した。⑤には、商店のないムラの住民出資の「なんでもや」、その原点である沖縄「共同店」との交流、また山村の豊かな資源に学び(塾)みんなで暮らし合うムラづくりに挑戦する栗田和則・キエ子ご夫妻などである。

創設当時から20年近く表彰委員長を歴任した山田民雄氏は、「表彰された団体、個人の皆さんに共通したファクターがある」とし、①質朴:野の研究者、②眼低:地べたの視線

別表:これまでの表彰(第19回~第37回)

回数	受賞者	受賞理由
第19回(1993)	宮城県田尻町産直委員会	農協組織として産直に取り組み地域活性化に貢献。
	諏訪部明氏	地域農民と共に有機農業の研究と実践に取り組む。
第20回(1995)	西川裕人氏	地域と農業高校をつなげ、ともに農業独自の道をさぐっている業績について。
第21回(1996)	古野隆雄・久美子 御夫妻	合鴨水稲同時作の確立と普及を通じて日本とアジアの農業に新風を送る。
第22回(1997)	栗田和則・キエ子 御夫妻	山村の自然との共存した暮らしの在り方を探求し、新しい山村の地域づくりに取り組む。
第23回(1998)	高松 求氏	「土の力」を引き出す米づくり、「豚の心」を読んだ飼養技術、「地域の教育」を重視した子供たちへの竹林の開放などユニークな活動。
第24回(1999)	斎藤 晶氏	立地(寒冷地)に適合した山地酪農を確立、自然と人や家畜の共存から農業の本来の姿を追求。
第25回(2000)	ささゆり会	農村レストランと交流事業を通し山里の美しさと豊かさを多くの人々と共有。
第26回(2001)	善ヶ島地区水田集団転作協議会	耕畜連携による飼料稲栽培定着の中心的役割を果たす。
第27回(2002)	農事法人「和郷園」	平均年齢20歳後半の若者集団(51名)による環境保全型農業、トレーサビリティの実施。

と発想、③先駆：持続と発展、④勁直：「出る杭」を貫く、⑤気根：不屈の意志の力の5点を挙げ、そこに流れる思想は、農的ロマンティズムであるとした。受賞者の行動力とお人柄は今も少しも変わっていない。

結び——新たな出発に向けて

山崎農研の会員は、それぞれ本職(家庭の主婦も含めて)を持つ。山崎農研は、車でいえばハンドルの遊び。自動車(本職)が正しく走るためには、ハンドル(行動)に遊び(考え方の余裕)が必要である。職種や年齢の異なる人たちの話し合い、現場の皆さんとの交流、それが正しく走らせる遊び(余裕)である。山崎農研もそんな「サロン」から出発した。

「農学は実学である」、「研究を現地に生かせ」、「分からなくなったら現場に行け」。そして「人間に優しく、人間を大切に」。これが創

立当時からの山崎農研の心構えである。

「研究・農業政策を現地に生かせ、わからなくなったら、農業・農村の現場で語れ」。戦後レジームからの脱却と早急な対応に追われる研究者や農政担当官には、もっとも求められることである。山崎農業研究所は、創立の原点に帰り、学生も含め多くの関係者とともに、今の時代だから必要な遊び(余裕)を探求し発信する必要があると考えている。

それは多分、経済成長至上主義ではなく、たとえば、①風土を生かした多様な農業・農村、②家族農業を主体とする食料の安定供給、③農業を継続的に営まれることによる環境・コミュニティ保全、④地産地消を基礎とした産業連携、地域交流、⑤住民主体の途上国支援などが新しい時代の検討課題になるように思う。

(こいずみこうろう=山崎農研事務局長)

回数	受賞者	受賞理由
第28回(2003)	宮古農林高校環境班	地下水汚染を防ぐため、土着菌と地域資源を活用して有機質肥料「バイオP」を開発・実用化。
第29回(2004)	鋸谷 茂 氏	健全な森林空間を保全、良質材産出の鋸谷式環境保全型間伐・育林法の開発・普及。
第30回(2005)	榎本牧場	牛の健康と牧場空間を創出、都市近郊に「オアシス牧場(酪農体験、ジェラード販売)」の形成。
第31回(2006)	原田 勉 氏	山崎農業研究所の創設と発展に尽力し、また自からの経験と信念から平和と健康の大事さをメディアで発信。
第32回(2007)	宮城県丸森町大張物産センター なんでもや	「むらに商店が無くなる」とき、自分たちの店を立ち上げ、地元産の直売、日常品の購買、そして語り合う交流の場をつくる。
第33回(2008)	野口種苗研究所・野口 勲 氏	地方の食文化を豊かにしてきた個性的な固定種を維持・増殖・販売を通しそれぞれの風土に生命力に満ちた野菜生産の定着。
第34回(2009)	「尾瀬ドーフ(有)」代表 千明市旺 氏	地大豆「大白大豆」を復活、遊休農地の活用、環境保全型栽培方法、素材と水にこだわる豆腐製造を通し、みんなが関わり合う農と食と暮らしのあり方を提案。
第35回(2010)	チャルジョウ農場 小川 光 氏	風土と作物の固有の力を活かした農法の確立と若者の就農支援
第36回(2012)	NPO法人 福島県有機農業ネットワーク	未曾有の原発事故。農業者、消費者、研究者、団体が連携、農の営みを通し「健康で安全な農と食の再生」に取り組む。
第37回(2013)	オンワード倉澤 倉澤久人 氏	地域の小さな水を活かす超小水力発電機の開発及び普及。